

「子どもたち」 / 「短い間だったけどありがとう」

双葉町の町立幼稚園・小学校は、原発で全町避難を余儀なくされ、2011年4月にいわきの銀行出張所を間借りして再開した。全校児童・生徒は11人ではじめられ、15人で終業式を迎えた。小学校1年生は2人だった。2人ともよく頑張った。読書好きの2人は、それぞれ1年間に151冊、143冊の本を読んだという。2学期からは新仮校舎での学びとなる。間借りでの勉学、少人数での学びは社会性を育むことが不足するのはどの校長の心配を、子どもたちの秘めた力が払拭した。

夏休みを終え、子どもたちは新仮校舎での新学期に夢を膨らませていることだろう。

(「福島民報」2014.7.19に基づく)

広野の子ども故郷に集結

広野町教育委員会主催で開催された「集まれ！ひろのっこ in 広野小」は福島第一原発事故で同じ学校に通うことが出来なくなった子どもたちの交流の場として、広野町に帰還した子ども、避難を続ける子どもたちが集まって再会を喜んだ。町内の約40人を含めた約130人の小中学生が参加した。久しぶりの旧友との再会をそれぞれが笑顔で楽しんでいた。

来年春には広野町に中高一貫校「ふたば未来学園高校」が設立され、佐藤知事は「校名には本県の未来を担う生徒を育てる学校としたいとの思いをこめた。」と語っている。

(「福島民報」2014.8.10に基づく)



「集まれ！ひろのっこ in 広野小」

川内っ子集う 村で初開催、バーベキューやビンゴ



初めて村で開催した
「川内っ子のつどい」

福島第一原発事故で県内外に避難している川内村の小中学生が交流する「川内っ子の集い」が村内のいわなの郷で開かれ、子どもたちが再会を喜んだ。これは川内村主催で毎年開催されていたが、3回目の今年は初めて村で開かれた。児童・生徒と保護者約50人が出席し、バーベキューやビンゴゲームを実施した。

今年は、このような集まりが市町村レベルで企画されていることが目立ったように感じられた。夏祭り、盆踊りも市町村レベルで県内外への避難者も古里への帰郷をこれに合わせて元のコミュニティとの繋がりを確かめていたように思われる。

全町民 安心の帰郷ねがう

楡葉町の人々はまだ、先の見えない中での生活を強いられている。現在89歳のKさんは3世代で楡葉町の自然の中で農作業をしながら幸せな生活をしてきた。が、あの日を境にKさんはご主人とともに娘のいる広島県へ、長男家族は東京へと避難せざるを得ず、生活は一変した。広島ではデイサービスにも通い、友人もできて不自由はなく、皆に本当によくしてもらっていた。が、やはり故郷の近くで旧知の仲間と共に暮らしたい思いが募り、ご主人と一緒に故郷の近くの仮設住宅に入居した。すぐに町民と家族同然の付き合いを取り戻したが、2012年7月に広島から戻って、12月にはご主人が体調を崩して帰らぬ人となってしまった。Kさんは「住み慣れた楡葉町の家を離れた生活で、心労があったのだろう。苦労もあったが、家には楽しい思い出が多く詰まっている。夫の心を思うと切なさが込み上げる」という。そして、「高齢者への声がけ

が大切だと言われているが、どの世代も避難で寂しさを抱えている。若者に集会などへの参加を呼び掛けている」という。そして「老若男女全てが安心して故郷に戻り、自分も夫と建てた家に住み、二人で耕した田畑で農作業が出来る日が来ることを願っている。」という言葉に込められた深い思いに心が疼く。

(「福島民報」2014.7.5に基づく)

仮設の人々のつづき

一人一人に個人的に対応する、アロマハンドマッサージをしながらの足湯では、体が緩んでくると、気持ちもホットして、ぼつぼつと語ってくださるつづきやきにハッとさせられる。ただ、じっとそのつづきやきを聴きながら、うなずくだけのひと時がとても貴重な時間の流れになる。いろいろなつづきやきがある。ただ聴くだけでそのままにしてはいけないようなつづきやきも中にはあり、必要なところに繋ぐ、そんな連携も重要だ。一人一人のつづきやきが発しているその人の叫びを正しく受け止めて対応する個別の関わりの必要性が増大している。



被災地のDV／地域の人権意識高め防止へ

ずっと気になっていた被災地のドメスティックバイオレンスについて「河北新報」が2014.8.19に取り上げていた。大震災から3年たって、配偶者やボーイフレンドからのDVが深刻化しているという。警察への相談件数は2013年の統計では宮城県警が前年比236件増の2,092件、福島県警が17件増の857件、岩手県警は70件増の368件。3県とも過去最多となった。そして24時間電話相談「よりそいホットライン」(一般社団法人社会的包摂サポートセンターが厚生労働省、復興庁の補助事業として全国展開)が13年度をまとめてみると、DV・性暴力相談の割合が被災3県でそれ以外の都道府県の2倍近くに達していたという。人の尊厳をないがしろにし、心身を傷つける暴力がはびこる地域社会でどのように復興を語ることができるのだろうか。

不明者を一斉搜索

震災から4年目のお盆月命日、県警など400名が行方不明者の手がかりを探して一斉搜索をした。浪江町請戸地区のがれき集積場となっている、「浪江小がれき集積場」などで、三片の骨らしき骨片が発見された。一眼レフカメラやカード類もみつかったという。この作業には県警察学校に入学した初任科生69人も交じていた。その中には、浪江町が古里、広野町出身者もいた。それぞれが自らの震災の体験を胸に「決して消えることのない行方不明者の家族の思いに応えられるよう」特別な思いで搜索にあっていた。最終的に処分する前に、今一度行方不明者の手がかりを求めて、気の遠くなるような集積された「がれき」を少しずつ、手作業で崩しながらの搜索を月命日に続けていることに、不穏な社会情勢の中で人としての在り方を感じ取られるようだ。(「福島民報」2014.8.12の記事を読んで)

震災関連死 (「福島民報」記事より取り出した数)

日付	6/12	13	21	25	7/2	11	16	17	25	29	8/8	13	14
人数	1,718	1,727	1,728	1,729	1,730	1,732	1,734	1,735	1,736	1,739	1,743	1,744	1,748
震災関連死と認定された人数		南相馬市 1人 双葉町 4人	葛尾村 1人	双葉町 1人	富岡町 1人	双葉町 2人	富岡町 2人	葛尾村 1人	双葉町 1人	富岡町 3人	双葉町 4人	南相馬市 1人	浪江町 4人

震災関連死と認定される人は一部の人であり、震災、原発事故が原因、起因となったと思っても認定されない人もいる。実際にはこの数字を超えているのではないだろうか。

※福島デスクニュースの発行号数を、本号から「通し番号」に変更いたしました。